

文学的立場編

文学・昭和十年代を聞く



阿部知二

井伏鱒二

金子光晴

中野重治

舟橋聖一

中島健蔵

石川 淳

久野 収

文学的立場編

文学・昭和十年代を聞く



久野
収

石川
淳

中島
健蔵

舟橋
聖一

中野
重治

金子
光晴

井伏
鱒二

阿部
知二

勁草書房

文学・昭和十年代を聞く

一二〇〇円

一九七六年十月七日

第一刷発行

編者代表 ◎ 小田 切 秀 雄

発行者 井 村 寿 二

東京都文京区後楽二ノ二三

東京都文京区後楽二ノ二三

勁 草 房

電話 ○三―八一四―六八六一

振替 東京・五―一七五二五三

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。港北出版印刷・谷島製本

0095-852500-1836

まえがき

昭和十年代という時代は、だれにとっても、むつかしい、つらい時代だったが、文学者にとっても、それを切りぬけるということの特別に困難な時代だった。それが過ぎ去ったあとでなら、なんとでもいえるが、日々に濃くなりまさる時代の暗黒のなかで、手さぐりで生きてゆくほかないようなところに追いつめられ、文学という自分の足場そのものがはげしくゆすぶられているときに——そして実際に、多くの文学者たちが次々と戦争と軍国主義との強圧・強制に、進んで、または心ならずも、服従し迎合していったときに、文学者としての独自の場を固執するということは、極度に困難になっていった。検閲は日々ひどくなり、直接の弾圧があり、また、迎合しない者や屈しない者には執筆の場が失われ収入の道がなくなるといったことがあり、さらには徴用によって強制的に軍報道班員にされ戦地に送られる、ということまでがあった。こういう状況のなかで、日本文学は空前の文学的解体・空虚化に陥った。

しかし、このなかでなお屈することなく、時代の重圧に対処するやり方は柔剛それぞれにちがっていたが、根本のところでは文学の場を守りつらぬき、そのことによって自己の文学の場を深くして、敗戦後にただちにさかんな活動を行なうようになった若干の文学者たちがいる。それらの文学者のなかから、『文学的立場』同人たちが特別な敬意としたしみをもち八名のかたにお願いして、おひとりずつ出て頂いて種々の問いに答えて頂いたのが本書である。『文学的立場』は、日本近代文学研究所メンバーを同人とする同人誌で、まったく手弁当の雑誌であるために、この八名のかたにはどなたにも謝

礼なしで座談会にお出かけ頂いたのであったが、ありがたいことであつた。でき上つた速記にも、十分に眼を通して頂くことができた。これが本になるにあたって、あらためて深甚な感謝の意を表したい。なお、『文学的立場』同人は現在、和泉あき・伊藤成彦・小田切秀雄・西田勝・古林尚・渡辺澄子の六名で、このうちのだれかが当日に病氣等で出席できなかったことなどもあり、だいたいいつも五名くらいが出席して、さまざまな面から質問を出しました話をひき出すための、いとぐちをつくつた。同人はここではもっぱらそういう機能をはたすことにとどめたので、問いのがわの名前は特殊な場合以外は消去することにした。

これは『文学的立場』の第二次二年間（季刊八冊）に連載したものが、いま一冊にまとめるのは、これが、読んできわめて興味深い、ということと、昭和文学とくに昭和十年代の文学の理解にあたつて、どうしても知っておく必要のあることが多い（この本によつてはじめて明らかにされたことが多い）、ということとに拠っている。絶望的に困難な時代を切りぬけることのできたシンの強い文学者の心と生活が、自由な形で、さまざまな面から語られているというおもしろさは類が少ないものだと思うし、研究者たちにとってはまた、ここで明らかにされていることを見ないで通ることはできぬ、というような重要な事実の多くをふくんでいて、現代文学史研究にとっては不可欠の書となっている、と思う。

わたしたちは、現代文学史にとって手ごたえの重い多くの証言や新事実を、語ってもらふことに成功した——と思つている。日本近代文学研究所は、研究所独自の仕事のひとつとしても、各時代の文学者について、こういう試みを続けてゆきたいと考えている。随時に二年間と限定して出す『文学的立場』の第三次は、いまその準備がすこしずつ進行している。

——いま、むきだしな形の強制・強圧はどこにも見えないような形で、しかし実質上の多様な強制と強圧は従来になかったような仕方人間をしいに息苦しくしめつけつつあり、ふたたびむきだしなそれに移行するけはいをさへ示している。「一九三〇年代」があらためて切実な関心となっているのはそのためだが、その三〇年代の後半と、その直接の結果としての四〇年代前半とを、あわせた時期であるこの「昭和十年代」の重い内容は、それにひきずりまわされながらそれに屈せず、文学者としての自己をつらぬき深めたこれらの文学者によって、多くの鋭利な切り口を通してここに明らかにされているのである。

一九七六年七月

編
者

文学・昭和十年代を聞く

目

次

まえがき..... i

I 新興芸術派の周辺..... 1

文学における知性 日本人の体質 家族
主義の問題 反撥と畏敬 島木健作の影
響 行動主義と人民戦線 『文学界』へ
の参加 奴隸の言葉 『風雪』の反響

II 徴用作家として..... 39

同人雑誌のころ 漂流ものへの関心
リトル先生 徴用のころ シンガポール
の大虐殺 からゆきさんと魚釣り 敗戦
前後 書きたかった伊東マンシヨ

III 右旋回への反撥..... 73

フランス人と満州事変 『資本論』を読む

IV 執筆禁止前後……………中野重治氏……………99

アナーキズムとの関係 『鯨』の反響
 中原中也と富永太郎 抵抗詩人デスノスの
 こと 南京虫の子供 文学者の戦争協力
 日本人の体質 戦争下の雑誌記者
 山中湖の鮒 現代詩への注文

『文学界』への勧誘を断わる 作家同盟の
 解散 二・二六と『閏二月二十九日』
 独立作家クラブの周辺 執筆禁止の実情
 雑誌『革新』と『歌のわかれ』 東京市役
 所分室での仕事 関西から連絡に来る
 『茂吉ノオト』のころ 徴兵と敗戦

V 作家の能動性を求めて……………舟橋聖一氏……………137

行動主義文学提唱のころ アナルコ・サン
 ジカリズムへの共鳴 文学者と組織 雑
 誌『文学界』と『行動文学』 反戦と歌舞
 伎趣味の二面 足尾鉾毒問題への関心
 『木石』の波紋 「戦火をよそに女と寝る」

文学者の戦争協力 『文学界』の変化
文芸家協会の改組 三島由紀夫事件の評価

VI 日本人の二重性 中島健蔵氏 173

「昭和十年代」のプリオリテート 文芸復興期の可能性 学芸自由同盟のころ
三木清の戦術 文芸懇談会と『作品』の性格
「吹溜り説」の根拠 『文学界』の変質
民族派への抵抗 島木健作の「科学的」
正宗白鳥の気骨 藤村のわかりにくさ
中河与一の役割 「懲用」の真相
「水湧き通り」と「ヤシの木街道」
天皇制の問題 日本におけるデモクラシーの線

VII 無意識の選択 石川 淳氏 219

福岡高校辞職の原因 炭鉱労働者との接触
「当時、大杉栄のファンだった」 マルクス主義運動との関係
『マルスの歌』前後 戦争下の日本近代文学研究 現代文学

とは離れて ジイドとシュールレアリスム
 鷗外の史伝物 宇野浩二の会 『佳
 人』と『普賢』 「同和事業」に關係 八
 月十五日前後 韶晦と無意識の選択

Ⅶ 『世界文化』での経験……………久野 収氏……………253

日独交換学生と私 『世界文化』の創刊の
 ころ 京大事件との關係 深田康算の学
 風 『美・批評』から『世界文化』へ
 中島栄次郎の保田与重郎批判 『日本浪曼
 派』への反措定 スキンシップ・デモクラ
 シー 羽仁五郎との友情 政治の優位性
 主義の残存 フランス人民戦線を知る
 「民衆糾合」の訳語 『世界文化』の急進
 化 ナチに追放された学者たち 戦前日
 本の自由主義 人民戦線の三つの位相

索引 昭和十年代関係年表……………293

新興芸術派の周辺——阿部知二氏

阿部知二^{あべともじ}

小説家・評論家・英文学者。一九〇三年六月二六日、岡山県英田郡湯郷村^{あべだ ゆわご}に生まれた。七三年四月二三日歿。八高から東大英文科に進み、三〇年『日独對抗競技』『白い土官』等を発表して文壇に登場、続けて『恋とアフリカ』『主知的文学論』を刊行し、新興芸術派の有力な選手として活躍する。その後、一時、舟橋聖一らと『行動』に拠ったが三六年『文学界』の同人となり、知識人の思想と行動の分裂を知的な、みずみずしい文体で描いた代表作『冬の宿』を世に問うた。また『風雪』（三八年）は日本における自由主義の敗北を側面から同情的に述べることによってファシズムへの批判を現わしている。戦後はその立場がさらにおし進められ、メーデー事件の特別弁護人、あるいはわだつみ会の会長になるなど、積極的に進歩的運動に加わるようになった。評伝『メルヴィル』（三四年）等、研究や翻訳も多い。

文学における知性

——阿部さんは、昭和十年代という厳しい時期を切りぬけて、今なおさかんに活躍している方ですが、あの時代をどういうふうにお考えになっていらっしゃるでしょうか、まず手はじめに、あの季節の発端の一つとなったプロレタリア文学運動の挫折、それから転向の発生、その時期、つまり昭和十年代の入口の時期をどういうふうに見ていらっしゃるでしょうか、それから伺いたいと思います。当時、阿部さんは通常、文学史では新興芸術派というグループに属していたわけですが、そのような立場にあった作家として、プロレタリア文学の挫折、転向という現象をどのように見ていましたか。

阿部 もしぼくの目から見たそういう問題を語れといわれるならば、その時代にいくまでに、それ以前私の手さぐりの道なり、あるいは私が今振り返って見たところの日本の昭和初期の状況なりを、しばらく問題にすることをゆるさるたいのです。

たとえば、ここに昭和九年を取ってみると、国連脱退が前年つまり八年で、美濃部達吉の天皇機関説が十年です。私が『主知的文学論』というようなものを書いたのが、大学を出た昭和二年から三年のちの昭和五年、満州事変が六年です。『冬の宿』を書いたのが昭和十一年、そういう時間関係になります。ここにおられる若い人たちには、やや遠い昔の話になります。昭和二年というと、ご存じのように、日本のひどい経済恐慌の時でした。しかし世間にうとくてのんきな気持ちで大学を出て、思わしい就職もないということ、仕方ないからというので、親戚のうちにめぐり込んで食って、大学院に通って「時をかせいだ」わけです。それから二、三年して、昭和五年に『主知的文学論』というのを多少気恥ずか

しい思いで——いささか気取って外国文学を引用したりしていますので——出しました。

しかし、自分の心の根本の問題としては、知性といえますか、そういったものが、文学にとってまったく無縁のものであるのかないのか、そしてもし無縁でないとすれば、それはどういう意味においてかと考えたかったです(文壇的に見れば、受けのいい主題ではないと思ひながら)。そして、恐らく今から振り返ってみて、こういうことを考えさせられた一つのきっかけとなったものの一つには、芥川竜之介のことがあったと思います。彼が死んだのは昭和二年。ぼくは特に、芥川に傾倒したわけではけっしてありませんが、あのような作家の死が、ただごとでないと感じたのは事実でした。荒正人君が、ある全集で、ぼくを農民出か何出か知らんが中産階級に設定すると言いましたけれど、そのぐらいのところではプチ・ブル的な感情の人間でありました。今、あなたもいわれましたが、根本的に言えばマルキシズムというものを知らなかった。心情的には関心が常にあったけれど、勉強しなかった。——そういうわけで、芥川に対しては、(アンビヴァレントという言葉でも使いますか)関心と反撥とが心の中で同居しているようなことでした。たとえばこんなこともあった。

『朱門』というのを編集した伊藤という人が、ぼくがあまり生意気なので、そのころでもぼくが多少自然発生的にラジカルなことを言っていると、「阿部君、あなたは芥川をどう思うか」それに対して、「ぼくは芥川に感心しない」というように、ぼくは答えました。その場合、自分では遠いものに反撥していると思ったのですが、——そしていまもそう思いたいのですが——その辺のところは、やや不明な点もあるでしょう。昭和十一年ぐらいのときに、一回、堀辰雄と軽井沢で、いっしょの部屋に泊ったことがある。

「阿部君、小林秀雄が、志賀直哉が好きで芥川が嫌いだというのは、あれは芥川みたいな観念的な男だ

からだよ」と言ったのです。それから帰って、小林に会ったら、「あいつは、また、少女が池のところを歩いていたとかなんとかお前に言っただろうなア」と言って（笑声）。やはり、彼らは、みずから待するところがあつて、人を人と思わぬところがあつたのでしよう。

飛んだおしゃべりしましたが——『朱門』の会で、ぼくは芥川を感心しないといいました。しかし、芥川の死ということは、宮本顯治が彼のような形で受けとめたと同じように、そのころの、彼の——「敗北」かなにかぼくは突きとめ得なかったが——一つの重大な問題を含んではいたと思います。そういうことが、私に『主知的文学論』というような形で、文学における知性というものを、もう一ぺん見直そうということを考えさせた一つのきっかけであつた。文学において知性というのは敗北するもの、とイキョールの線を引いていいものか。いや、問題はそれがどんな種類の知性であるかということでしょう。これは、去年（一九六九年）の六月、『文学』という雑誌に書いたけれど（『内面と外面との対立——比較文学的に』）、今も私はそのことを問題にしているわけです。文学に知性はいらんものであるというように大ざっぱなことで話は終るものではないと、いまでも思っています。

『主知的文学論』というものの中に、私は文学は心の底の矛盾混沌の胚胎し、それが形をとって生まれてくるものであつて、その形をとって生成するということは、いいかえれば、人が混沌に秩序をあたえるという作業をすることにちがいない。そしてその矛盾混沌というのは、心理的に言えば潜在意識の世界であろうというようなことを、あの本に書いておりますが、今日も（私があまり進歩しないのか）同じような考え方です。文学は混沌たる人間の感性の深い淵から湧き出す本能的なものだけれど、それに知性というものが取っ組み合うところで芸術になるんだと思ひながら、私はまだこれを追求していく

つもりなのです。

文学における知性というときには、もちろんそうしたことが問題となるのではないと考えてます。たとえば、それはさきほどの転向についても、かわるところがあると思います。たとえば、あのころの転向は、かなり主情的な動きだったのではないかと思うのです。たとえば天皇とか母親とかというような情的なアップビルによって動いたというような問題はあったでしょう。文学にもつてくれば、日本浪漫派とかいうような主情性が、やがて日本文学の風土をがらりと変えたりしたのでした。これはちょっと話が飛びすぎた感じですが、そうした問題を、さっきの芥川のこと結びつけてみれば、ぼくは、あのころ次のように考えたのです。——芥川は死ななくてもいいのじゃないかということです。もし彼が、ほんとうに知性の作家ならば、その任務、あるいは仕事は、これからであったのではないかというわけです。それにつけて話を、またあの本へもどしましょう。

『主知的文学論』というのを書いたころは、第一次大戦後で、イギリスで例のT・S・エリオットなどが出て、主知的文学というものが強く打ち出されたところで、それはもちろん、西ヨーロッパの他の国にも見られた傾向でした。さらにそれを史的に展望すれば、ヨーロッパには、アリストテレス以来、「古典主義」というものがあって、主知的文学の伝統が長い間、太く強く歴史を貫いてきたのです。ダントネーも、ミルトンもあり、フランス古典劇もあり、ヴォルテールもあり、スウィフトもあり、というわけです。ところが、近代に入って、十八世紀末ごろから、急にロマン主義の氾濫——つまり感性の氾濫になり、文学とはそれではならないようになった。その感性過剰への反抗が、いまいった第一次大戦後の主知主義でした。